

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 2号

12月24日(火)

【愛知】

大同大学大同高等学校

ト音

この劇は暗い中での藤 秋生の会話から始まる。彼らは周囲で起こる嘘を暴こうとする。

笑えるところ とシリアスなシーンがきれいに織り交ぜられており、見ている観客を飽きさせることのない演出だった。幾つかの部屋が一つの舞台上に配置されている構成で空間を大きく使っていた。さらに、場面ごとに照明の切り替えがあり、キャストの出入りがスムーズだった。また、暗転中も音響が流れていたため、集中を途切れさせない工夫がなされていた。藤 秋生の会話のテンポがよく、息の合ったやり取りが印象的だった。キャスト陣が自分の役をしっかりと捉えて演じていた。その中でも特に坂内先生が、教師としての話し方や立ち振る舞いがよく表現できており、演技が際立っていた。

話が進んでいく中で、藤と秋生の風貌があまりにも似すぎていたり、同じ場所に居るはずなのに同時に名前を呼ばれることがなかったりすることが、観客に違和感を懐かせていく。藤 秋生は長谷川と手を組み坂内先生のウソを暴こうとするが、その最中に坂内先生が倒れてしまう。さらに、五味先生との会話の中で、藤 秋生は自分自身と向き合わざるを得なくなる。この場面で効果的に使われていたのが犬の鳴き声である。犬の鳴き声には、笑いの要素や大切な部分の意識付け、坂内先生のウソを隠す効果があるという一方で、坂内先生がウソをついていることを周りに知らせる効果もあるのではないかという意見も出た。

藤と秋生が言い争いをしていく中で、自分たちが実は同一人物だということに気が付き始める。秋生という人物は藤の辛さやストレスが作り上げたもう一つの存在（人格）だろう。そして、最初は「ウソをつくことは良くない」と主張していた彼らだが、しだいに「誰かのためにつく必要なウソもあるのではないか」と考え始めるようになる。そして最終的には、彼らは「藤秋生」という一人の人物に統合された。

この劇を通して、自分と向き合うことや多数派の意見に惑わされず自分の意見を伝えることの難しさ、また、色々なウソはあってもいつかは真実を伝えることの大切さが伝わった。